〔研究ノート〕

近代日本のブライダル報道

今　井　重　男

目次

１．緒言
２．『読売新聞』の創始と明治時代
　２．１「小新聞」の登場
　２．２ブライダル関連記事諸元
　２．３「維新から国家昂揚の時代」のブライダル関連記事概要
　２．４「国家存亡と西洋化の時代」のブライダル関連記事概要
３．明治時代のブライダル関連記事
　３．１「社会」,「その他」に関する報道
　３．２「海外」,「皇室」に関する報道
　３．３ブライダル関連「広告」について
４．結言

１．緒言

明治という時代は，数百年続いた幕藩体制が瓦解し新政府が作られ，あらゆることが大きく変わった時代であるが，頗る付に変化したものの1つが結婚（＝ブライダル）である。

変わった原因は大きく2つ考えられる。まず生活スタイルの変化である。髷を落とし，帯をベルトに替え，基本的に徒歩だった移動が乗り物を利用するようになり…，多くの風俗習慣が激変した。当然ブライダルの有り様も変わり，人前結婚から明確に神を意識した結婚形式となり，駕籠での嫁入りが「古式」と表現され，皇族の婚礼過程も詳らかにして，さらには海外の庶民や王室のそれも知られるようになった。

変化を促したもう1つの原因は，人々の持つ，あるいは触れる情報量の増加である。人々が情報を交換することは，人類の発生と紀元を一にする，という考えかたがある。文字を持たない未開の時代にも新知の交換をしていたのであって，つまり情報のやり取りは極めて本能的で社会生活の重要な営みと言えよう。本稿では，こうした情報のやり取りを媒介するものとして新聞に注目した。新聞がこうした人間の本能，社会生活の必要を満足させる機能を具備するとすれば，その祖は相当古い時代に遡ることになる。これら新聞史に関する論攷も興味深いが別稿に譲るとして，われわれは，新聞発達に必要な識字率の向上，印刷技術の進歩がわが国で揃ったのは明治時代だと考えている。新政府の大量の官公報や鎖国の反動による翻訳本の続出，あるいは教育の普及と高等化が，国民の意思に関係なく識字率向上と印刷技術向上を推進させたとの解釈である。このような素地の下，わが国の

新聞は勃興したのである。新聞発行によって，それまで人と人の結びつきによって情報交換されていたことが，発行者あるいは記者と読者の合意によるものとなり，触れることできる情報の種類，範囲も一気に拡大していった。

結婚は人類誕生以来，形を変えながら現代まで続くものである。しかも，一人ひとりにとって，その意味が異なる複雑怪奇なものであるにもかかわらず，社会・時代の影響を強く受けるという不思議な儀礼である。このように掴みどころのない結婚を考察対象にする場合，歴史という時間軸を含めながら，社会的要因，文化的要因など，いくつもの条件を考慮しなければならないと認識する。しかしわれわれの研究では，惜しむらくはそこまで及ぶ状況ではない。以上のような問題認識に基づき，本研究ではあらゆることが一変した明治時代に，ブライダルについてどのような報道があったのか，同時代感覚でその軌跡を追おうと思う。具体的には，『読売新聞』創刊以来の，ブライダルを扱った新聞記事・広告を渉猟するという作業である。新聞記事は当時の記者が毎日書き続けたドキュメントであり，他方，新聞広告は広告主が読者に訴求したいことや受け入れられるであろうと予想した世相を映す鏡である。新聞記事・広告をこのように規定した上で，折々の新聞記事・広告を拾いながら時代の移り変わりを探索し，ブライダルがたどり，そして向かう先の基礎研究としたい。

本稿の構成は次のようになる。続く2章で，『読売新聞』が創刊されるに至る時代背景と，明治時代のブライダル関連記事の諸元を明らかにする。次の3章は，後述する記事の分類コードに従い「社会」，「その他」，「海外」，「皇室」，「広告」としてくくられる内容について，われわれが特徴的であると選択した96本の記事を概観する。そして最後の4章では論攷結果と今後の研究課題について簡単に述べる。

2．『読売新聞』の創始と明治時代

2．1「小新聞」の登場

維新後明治政府は，新政府の方針や法令を国民へ周知する広報役として利用するため，新聞発行に力を貸すようになっていた。1871（明治4）年[(1)]に制定された新聞紙条例は，「新聞紙ハ人ノ知識ヲ啓開スルヲ目的トスベシ」，「人ノ知識ヲ啓開スルハ頑固偏隘ノ心ヲ破リ，文明開化ノ域ニ導カントスル也」[(2)]と，当時の政府の新聞観を表す。政府は，文明開化政策を紙面で支援する新聞に対して積極的に情報提供したほか，新聞原稿逓送を無料とするなど事業の保護と育成に努めた。東京では1872（明治5）年に『東京日日新聞』，『日新真事誌』，『公文通誌』（後の『朝野新聞』）などの日刊紙が登場するも，権力を握る藩閥の動静により変転する政府部内の事情もあって各紙迷走を繰り返した。そして，1874（明治7）年1月の民選議院設立建白書の提出を機に，世論公儀を主張する民権派新聞と，時期尚早で

(1)　本稿での暦年表示は，西暦に続きカッコ書きで元号を併記した。これは時代のイメージを促すことを目的としている。このような目的に合わないと判断した記述は西暦のみとした。

(2)　本稿は原文に忠実な転記であるとともに，読みやすくすることも基本としている。明治時代の法文はじめ記事の復元収録に際しては，原文を尊重して，可能な限りかなづかいはその当時のままとしている。また。記事の併記は章，節内で年月日の昇順とする編年体を原則としたが，記事の関連事項を扱う必要のある場合は適宜に前後させた。

あるとの論を張る政府系新聞との対決に突入していった。

他方，これらの新聞とは全く性質の異なる新聞が，主として戯作者の手によって発刊される。当時の言葉を借りれば，いわゆる「小新聞（こしんぶん）」の登場である。前述の新聞が政治的で知識階級を読者とするのに対して，この新聞は娯楽的で（発刊当初は特に）市井の婦女子が読者であった（小野,1982：99）。1874（明治7）年11月に『読売新聞』が，政治問題を取り上げず，現代で言うところの社会面で取り扱うようなニュースや読み物専らの，ルビ付きの平易な新聞＝小新聞として創刊した。そして翌1975（明治8）年には『平仮名絵入新聞』（後の『東京絵入新聞』），『仮名読新聞』（後の『かなよみ』）などが同じ系統の新聞として発行される。言論に重きを置く新聞は大判の紙面サイズから「大新聞（おおしんぶん）」と称され，平易な新聞はサイズが小型であるため「小新聞」と呼ばれた。「大新聞」と「小新聞」の特徴的な違いは表1の通りである。また，「大新聞」の記者は身分と教養の高い士族が多く，記事も漢文調の文語体で書かれており，読みこなすには漢学の素養が必要であった。一方で「小新聞」は，身分の低い戯作者出身の記者が多く，彼らは艶種，忠君種，孝行種，芸者種などを口語調で書き，記事の末尾に「是だから虚は顕はれ易いものに違ひ有ません」（『読売新聞』，1877年3月5日）といった勧善懲悪的の説諭が付くことも頻繁であった。

表1　「大新聞」と「小新聞」

	大新聞		小新聞	
新聞紙	東京日日新聞 朝野新聞 大阪日報	郵便報知新聞 曙新聞	読売新聞 かなよみ新聞	東京絵入新聞 浪華新聞
体裁	4ページ大型		4ページ小型（大新聞の半分程度）	
文体	漢文口調が多い。社会雑報以外はルビ無しカタカナ書き。社会雑報はルビ付きひらがな書き。		口語体でひらがな表記。漢字にはすべてルビを振る。官令にはカタカナを用いることもある。	
官令	原文のまま，多くのページを割いて掲載。		国民生活に直接関係のあるもののみ掲載。	
論説	あり		なし	
報道	政治，経済，海外種が多い。		艶種，忠君種，孝行種，芸者種，演芸など，社会面のような雑報が多い。	
読物	時事問題，海外知識関連物。		雑報に近い読み物を絵入で掲載。	
投書	政治に関するものが多い。		社会雑事に関するものが多い。	
記者	漢学者，洋学者，政治論者，学生など。		戯作者，国学者，狂歌師など。	
読者	中流以上の男子。（無新聞時代に漢籍国書を読む層）		中流以下の市井の人々，婦人，芸人，芸妓など。（無新聞時代に草双紙，絵本を読む層）	

出所：小野（1982：109-110）を参考に筆者作成

２．２ブライダル関連記事諸元

ところでブライダル関連記事[3]という場合，それが何を指すかは必ずしも明確ではない。記事の標題にそれが表出している場合もあれば，内容で記されている場合もあろう。あるいは，わずかに熟語として記述されていることもある。それらのどこに線を引きブライダル関連記事とすることが適切なのか，悩ましい問題である。そこでわれわれは，『読売新聞』の記事検索サービス「ヨミダス歴史館」の「キーワード検索」を判断基準とした。「ヨミダス歴史館」とは，この名称によって株式会社読売新聞東京本社が提供するインターネット上での読売新聞記事データベースサービスで，1874年の創刊以来の朝刊，夕刊，号外などのほか，地域版や同社の発行する英字新聞までを網羅している。本稿が「キーワード検索」に用いた語は「結婚」，「結婚式」，「成婚」，「婚姻」，「婚姻式」，「婚礼」，「婚礼式」であり，これらのいずれかがキーワードに該当するものを「ブライダル関連記事」として，それ以外は除外した[4]。これは，発行者『読売新聞』の判断を尊重し，それに従う立場となる。

本稿が通読した記事に関する諸元は表2の通りである。調査対象としたのは明治時代に発行の『読売新聞』であるが，具体的には1874（明治7）年11月2日の創刊号から，明治時代が終わる1912（明治45）年7月30日発行号までの12,655号である。その間の記事は約60万本，広告は約23万3700稿あり，上述の検索語でブライダル関連記事として検索に引っかかったのは記事が3,203本，広告が172稿の合計3,375本（稿）であった。

われわれがブライダル関連記事として取り上げた3,375本の記事を年ごとに，「ヨミダス歴史館」の分類コード別[5]にまとめたのが表3「明治時代のブライダル関連記事」である。表3は各年代の理解促進のため，日清戦争の前後（1895年・明治28年）で二分している。1894（明治27）年

表2　ブライダル関連記事　諸元

調査新聞	『読売新聞』朝刊・夕刊・号外
調査期間	明治時代
調査対象紙	1874（明治7）年11月2日の創刊号～1912（明治45）年7月30日発行号。計12,655号
調査期間記事総数	記事：約60万本，広告：約23万3,700稿
調査対象記事	ブライダル関連記事
対象記事検索法	「ヨミダス歴史館」の記事検索で，「結婚」，「結婚式」，「成婚」，「婚姻」，「婚姻式」，「婚礼」，「婚礼式」のいずれかが検索語となっている記事。
対象記事数	3,375本（記事：3,202本，広告：173稿）

(3)　本稿では，記事以外に広告も調査対象としている。

(4)　これらの語以外に「ブライダル」，「ウエディング」でも検索を試みたが，該当記事に変化がなかった。明治時代の『読売新聞』では，①この2語を使用しなかったか，②「ヨミダス歴史館」がこの2語を検索キーワードにしていないか，のどちらかが原因であると思われる。

(5)　記事の分類コードのうち，「社会」，「皇室」，「広告」は「ヨミダス歴史館」の分類コードをそのまま利用している。他方，「海外」は「西欧」，「アメリカ」，「アジア」，「旧ソ連・東欧」，「アフリカ」，「中東」の合計で，「その他」としたのは前述の「社会・皇室・広告・海外」以外のすべてで，「犯罪・事件」，「文学」，「婦人」，「生活」，「情報」，「政治」，「行政」，「軍事」，「地方」など45分類をまとめている。

開戦の日清戦争では「ドイツ式の陸軍とイギリス式の海軍を」(司馬，1978a：29) 装備して朝鮮をめぐり大国「清」と交戦状態に入り，翌年の講和条約では①清・朝鮮間の宗主・藩属関係解消，②日本への領土割譲，③賠償金支払いなど，有利に交渉した。つまるところ「ほんの二十余年前まで腰に大小をはさみ，東海道を二本のすねで歩き，世界じゅうのどこの国にもないまげと独特の民族衣装を身につけていたこの国民が」(司馬，1978a：29) 大国相手に戦勝したのである。明治維新を遂げ，怒涛のように押し寄せた文明開化の荒波にもまれ，殖産興業だ，富国強兵だと自ら鼓舞して息せき切って欧米列強に追いつこうとしたわが国にとって，この戦争をわれわれは時期を画する大きな出来事であったと捉える。そこで，『読売新聞』創刊の1874 (明治7) 年11月2日から日清戦争終結の1895 (明治28) 年末までを「維新から国家昂揚の時代」とした。

戦争に勝利した日本は，清国より2億両(テール)の賠償金と，台湾，澎湖島および遼東半島という領土を得た。ところがこの19世紀末は，侵略と謀略の時代，すなわち帝国主義の時代であった。日本は講和条約調印直後から，ロシアやフランス，ドイツらが語らって“世界の公論”として遼東半島の還付を求められた。日本は，その要求を拒むことができず応ずるとともに，軍隊の近代化＝西洋化を急いだ。その後も日露間の関係は軋み続け，「あまりにも冒険的要素がつよく，勝ち目がきわめてすくない」(司馬,1978b：300) にもかかわらず，1904 (明治37) 年に開戦してしまう。本稿では，日清戦争終結の翌年1896 (明治29) 年から明治時代が終わる1912 (明治45) 年7月30日までを「国家存亡と西洋化の時代」とくくった。次いで，これら期間の概要を見ていきたい。

２．３「維新から国家昂揚の時代」のブライダル関連記事概要

1877 (明治10) 年の西南戦争は，「小新聞」に大きな変化を生じさせた。この九州で起こった士族による武力反乱の報道は「大新聞」がその主導権を握ったが，『読売新聞』は「小新聞」として唯一，(京都までであるが) 記者を特派した。西南戦争は，それまで国内政財界の動静や経済情報を載せることが稀な「小新聞」に，報道を開始させた点で画期的な意味を持つ。「新聞が書籍視された傾向は次第に薄らいで報道機関として必要欠くべからざるものと認められるに至」(小野,1982：107) っていくのであった。戦況報道が読者に好評であったことに自信を深め，『読売新聞』はこの戦争について号外を発行するほど熱を入れて報じた。「大新聞」は終戦後，自由民権運動の奔流に押し流されるように言論活動を活発化させ，その分報道を軽視した。他方で「小新聞」である『読売新聞』は戦後も報道活動の充実に努め，瞬く間に部数を伸ばして東京で最も読まれる新聞に成長した (山本,1978：36-37)。

この時期の『読売新聞』ブライダル関連記事に認められる特色に，同期間の全掲載記事の半分以上を「社会」(54.0%) が占め，続く「その他」(29.3%) と合わせて全体の80%超となることがある。特に「社会」への記事集中は，創刊当初は海外からの特派体制が未整備であったことや，「小新聞」の特徴である雑報を好む傾向が影響したのではないかと推察される。1885 (明治18) 年までの創刊12年間は「社会」，「その他」以外の分類が，年間10回以上掲載されたことはなく，専ら国内の雑報を中心に報道されていたことが理解できる。ところが，1886 (明治19) 年以降，「海外」に関する記事が13回 (1886年)，11回 (1887年)，23回 (1888年) と，1年間に10回以上掲載されるようになった。読者の関心が，日本国内から海外へ拡がっていったのか，それとも新聞が読者大衆をそのように導いたのか不明であるが，少なくとも，読者が海外事情に触れる機会が増えたたことは事実であった。

表3　明治時代のブライダル関連記事

		社会	海外	皇室	その他	広告	小計
維新から国家昂揚の時代	1874年　（明治7）	2			5		7
	※11月2日創刊						
	1875年　（明治8）	29	1		17		47
	1876年　（明治9）	63		4	28		95
	1877年　（明治10）	48		2	20		70
	1878年　（明治11）	57	2	1	26		86
	1879年　（明治12）	49		1	25		75
	1880年　（明治13）	40	1	2	33	4	80
	1881年　（明治14）	53			23	3	79
	1882年　（明治15）	49		1	30	5	85
	1883年　（明治16）	37	2		24	2	65
	1884年　（明治17）	48	5		32	7	92
	1885年　（明治18）	45	2		31	7	85
	1886年　（明治19）	32	13	3	20	4	72
	1887年　（明治20）	28	11		9	3	51
	1888年　（明治21）	40	23		21	9	93
	1889年　（明治22）	19	16		32	7	74
	1890年　（明治23）	27	6	2	21	8	64
	1891年　（明治24）	39	7	5	14	7	72
	1892年　（明治25）	37	7	11	19	3	77
	1893年　（明治26）	71	25	2	23	6	127
	1894年　（明治27）	35	14	13	13	4	79
	1895年　（明治28）	29	3	3	10	3	48
	小計	877	138	50	476	82	1,623
	（シェア）	54.0%	8.5%	3.1%	29.3%	5.0%	
	年平均掲載	42	7	2	23	4	77
国家存亡と西洋化の時代	1896年　（明治29）	24	7	1	11	9	52
	1897年　（明治30）	18	4	5	21	12	60
	1898年　（明治31）	20	2	4	22	6	54
	1899年　（明治32）	20	1	20	14	3	58
	1900年　（明治33）	25	10	151	35	3	224
	1901年　（明治34）	23	12	17	25	4	81
	1902年　（明治35）	32	15	9	25	10	91
	1903年　（明治36）	18	5	4	31	5	63
	1904年　（明治37）	11	7	2	62	6	88
	1905年　（明治38）	33	29	29	40		131
	1906年　（明治39）	49	29	4	53	3	138
	1907年　（明治40）	62	27	10	35	5	139
	1908年　（明治41）	42	13	21	37	1	114
	1909年　（明治42）	62	16	24	50	9	161
	1910年　（明治43）	38	16	17	44	4	119
	1911年　（明治44）	38	9	4	49	7	107
	1912年　（明治45）	12	9	3	45	3	72
	※7月30日まで						
	小計	527	211	325	599	90	1,752
	（シェア）	30.0%	12.0%	18.6%	34.2%	5.1%	
	年平均掲載	32	13	20	36	5	106
	合計	1,404	349	375	1,075	172	3,375
	（シェア）	41.6%	10.3%	11.1%	31.8%	5.1%	
	年平均掲載	37	10	11	29	5	91

２．４「国家存亡と西洋化の時代」のブライダル関連記事概要

明治という時代は，近代化を急ぐわが国が，威信をかけて他国と戦った時でもあった。そして，戦争は新聞をより拡張させた。戦争へと世論を盛り上げるのも新聞であれば，開戦後の戦局がどのように展開しているのか，出兵した家族や友人・知人がいる戦地がどうなっているのか，新聞の報道が国民の情報欲求を満たした。こうして新聞は国民意識昂揚に貢献し，伝達・情報宣伝機能としての地位を高めていった[(6)]。日清戦争後の新聞業界は，読者本位に傾斜して徒に雑報を増やし，新しい趣向を競い，あるいは広告開拓に力を入れた。「小新聞」のみならず「大新聞」でさえも，紙面の第三面（＝社会面）に掲載されたことが語源の三面記事に，艶種，匹夫匹婦の喧嘩，変死・情死の類が増え，新聞全体の通俗化が進んだ。こうした三面記事の横行と劣化は社会問題として捉えられることもあった。当時の雑誌界で発言が重たかった『太陽』や『反省雑誌』（後の『中央公論』）などは，三面記事の弊害を挙げて攻撃した。『太陽』はある新聞紙に掲載された記者募集広告に対して厳しく批評する。新聞記者となる唯一の資格は，論文及び雑誌体の文章を書き得る一事を有すればよく，普通教育や専門技芸の教育を受けなくても，公権停奪の処分を受けていても，少しの文才があれば足りるとして，「輙（すなわ）ち筆を取りて社會の褒貶戒飭（かいちょく）の事に當たらしむ是れ小兒をして利刄を揮はしむるよりも危険」と批判する。そうした中にあって『読売新聞』は気品を保ち，悪徳醜雑の記事を掲載せず，他方で文学記事が豊富であった[(7)]ために文芸愛好家や中流以上の家庭で愛読された（小野,1982：261 ～ 263）。

「国家存亡と西洋化の時代」の『読売新聞』のブライダル関連記事の特徴は，「社会」に関する記事の割合が減り「その他」（34.2％）が最も多く掲載されたほか，日清戦争前はシェアが3.1％と8.5％であった「皇室」と「海外」が，戦後はそれぞれ18.6％，12.0％に掲載頻度が増えた。「その他」が増えた理由は，新聞社が記者の収集した情報を，あまり取捨選択せず多様に掲載した結果ではないかと推察する。また，「皇室」関連記事のシェアが6倍も増加した最大要因は，1900（明治33）年の皇太子・嘉仁親王（後の大正天皇）と公爵九条道孝の娘・節子（さだこ）の結婚である。この年『読売新聞』は，実に151本の「皇室」記事を掲載した。151本すべてが皇太子結婚の記事ではないが，ほとんどはこの慶事に関する報道である。そしてこの結婚は神前結婚式の展開の画期的な転機となった。すなわち，同年4月公布の皇室婚嫁令[(8)]に依った，宮中史上初めて賢所で行われたこの式を，神社で挙げるべく工夫改良し普及したものが現在の神前結婚式である[(9)]。新聞各紙はこの婚礼を大量かつ詳細に記事とし

(6)　たとえば『読売新聞』（1894年10月23日）は，日清戦争を戦った陸軍工兵一等卒，原田重吉の軍事美談を掲載した。原田は暗鬱な北国地方の貧しい農家に生れて，十分な教育も受けられず育ったが，平壌攻略の決死隊勇士となり勇猛果敢に戦い金鵄勲章を受けた，という記事である。こうした軍国美談はわが国の国民意識の統一と読者の裾野拡大に貢献したと考えられる。

(7)　日清戦争後，毎週月曜日に第四面を全部文芸・評論の特殊ページとする「月曜附録」を開始した。以来この「月曜附録」は大正期まで，権威ある文芸欄として『読売新聞』の特色となった。新設初年だけでも，島村抱月，依田堀海，島崎藤村，樋口一葉などの顔ぶれが登場し，評論，随筆，詩文を投稿した（読売新聞社,1987：245）。

(8)　皇室典範に基づく諸規則，宮内官制及びその他の皇室の事務に関して定めた皇室令の1つ。公布以後，天皇大婚式，皇太子皇太孫結婚式，親王および王結婚式は，すべて宮中賢所で行う神前式となった。その後同令は，1910（明治43）年3月に制定の皇室親族令の附式第一編「結婚ノ式」に含められた。

(9)　一般に神前結婚式の儀礼は，この結婚式で初めて儀式化されたと述べられることがある（村上,1970：160 ～ 161ほか）。宮中の神前結婚を範としながら，記紀神話に基づき形式化して神社で結婚式を挙行するようにした，との主張である。しかし，今井（2014：348）で指摘したように，室町時代に創作された婚礼法に，式場の

て取り扱った。その事実を踏まえれば，その後の神前結婚式の普及に新聞報道が果たした役割は小さくないと考えられよう。

３．明治時代のブライダル関連記事

明治時代の『読売新聞』に掲載されたブライダル関連記事は，広告を含めて3,375本である。本稿を著すにあたり，われわれはそれらの記事すべてを通読した。記事を読み感じたのは次のようなことであった。たしかに，それが新聞記事であるという性格上，記者の主観が多分に織り込まれている，あるいは極端な例を面白おかしく記述したものもあるだろう。しかしわれわれは，こうした事実を斟酌した上で，テレビはもちろんラジオさえも存在しないこの時代の日本人は，読み物，とりわけ新聞報道を通じて“世の中”に関する知識を獲得していたであろうことを生々しく感じたのであった。それは，記事の書き方を平易にしてすべての漢字にルビを用いたこと，社会雑事を扱う記事では教訓的な文章が散見できること，投書欄を設け一般読者の意見も積極的に掲載していたこと，…などさまざまな点において直観できた。このような理解の下，明治期のブライダルの状況を分かりやすく，あるいは特徴的に反映していると思われる記事96本を選んだ。以下，先述の分類コードに従って，見出しとともに概略を解得したいと思う。

３．１「社会」，「その他」に関する報道

分類コード「社会」の記事は1,404本あり，明治期ブライダル関連報道の４割以上を占め，年平均37本掲載された。他方，「ヨミダス歴史館」本来の分類コードである「犯罪・事件」，「文学」，「婦人」など45分類を分析便宜上まとめ「その他」とくくった記事は1,075本，記事全体の約32％のシェアで，記事としての年間平均取り扱い回数は29回である。「社会」，「その他」の内容を表現する特徴的な記事を見出しとともに表４にまとめた。

全体を俯瞰して目につくのは，何かと華美となり，高額となりがちな結婚を嗜める記事である。「婚礼の宴会で大盤振る舞い」（1875.12.15），「仲人と３人の手軽な挙式と，７日続きの超豪華版」（1876.2.23），「結婚式は分相応に，見えを張っては出費多く無駄だ」（1877.11.17）などがその典型で，事実，「派手な結婚式を挙げた社員を三井組が謹慎処分／横浜」（1876.5.15）では「（社員の華美な婚礼に対して）慎みと申し付けられましたと言うが，三井組の規則の厳しいのは実に良いことであります」との記述が見えるほか，「婚礼費用に困った左官職，衣類を盗み質入れ，逮捕」（1886.1.9）といった犯罪も発生している。新聞では，華美を改めることを勧めるように「便利な新婚礼式」（1910.2.12）はじめ，家庭の実益に関するアイデアコンテストでは「新案結婚式」（1908.8.23）が１等を獲得している。この「新案結婚式」の提案者は，婚礼が虚栄心にかぶれたり，従来の慣習にとらわれて無意味な結婚の方法を墨守したり，借財をしてまで贅沢を尽くす結婚式が多いことを「笑止千万のことである」と斬り捨て，自分が結婚するにあたって新案をもって結婚したという。婚礼日は紀元節[10]

床の間に伊弉諾・伊弉冉二神を勧請する装飾を施すとの記述が見られることから，神前結婚式の始まりを嘉仁親王の結婚式に求める説は支持していない。

(10) 記紀神話で日本の初代天皇とされる神武天皇が即位した日（紀元前660年１月１日）を明治に入り新暦に換算し２月11日と定め，1872（明治５）年に「紀元節」祝日とした。太平洋戦争後に廃止されたが，1966年「建国記

とし，儀式は「万事質素を旨とし，煩瑣な礼儀は一切廃し」，自宅にて午前10時から挙行したらしい。記事を読む限り，式場は「汚らわしい料理屋」を選ばないで，当時一般的であった夜間の式実施を避けた点あたりを新式と認めているようである。また提案者は，夫婦間の心得や父母祖先に対する道，育児，衛生，交際，家事などについて「家庭憲法」100箇条を定めたことが良かったと強調する。そしてそれを厳守しながら「円満で希望に満ちた家庭」を築き，「万事万端秩序が整頓して，父母弟妹も非常に満足してくれて，年中和気が家に満ち渡って」いるということであった。

次に，結婚風俗に関する記事を紹介しよう。それらは，「結婚風俗は国によって様々　日本では双方の親子が相談しあって決めたい」(1875.1.26)，「クリスマスの日に築地の学校で結婚式　他の教会から70人が出席／東京」[11] (1877.12.27)，「各地の婚礼習慣」(1893.8.5)，「婚礼の装束」(1904.12.1)，「出雲大社東京祠と結婚式」(1907.2.17)，「日比谷大神宮で神前結婚　7月に45組」(1907.8.3)，「結婚に関する風習　吾妻琴と御新造」(1912.4.28) といった当時の方法に関する記事や，国際結婚に関する「外国人との結婚調査」(1887.1.19)，「駕籠で輿入れ　近ごろめずしい古式の婚礼」(1893.2.3) として時代の変化を捉えた記述，あるいはわれわれの先達ともいえる婚姻故習に関する学者の講演「婚姻に関する古法風俗」(1891.4.19-20) などである。このような国内のブライダル概況にとどまらず，「深夜に教会の外で婚礼　牧師が窓から顔を出して式を挙行／米国」(1876.12.30)，「トルコ人の婚礼花嫁側が嫁入り支度から生活費まで持参，活動的な儀式」(1885.8.26) といった海外の事例を紹介する記事もあった。

現代同様に，明治時代においても著名人や芸能人などのブライダルに関する報道も見られる。「新婚　日比谷大神宮で戊年最初の婚礼　田代歓六と佐羽千代子」(1910.1.5)，「高橋是賢と黒木愛子の結婚披露会」(1910.3.13) は，前者は軍人と実業界，後者は政界と軍人の令弟令嬢の婚礼報道である。高橋是賢は是清（内閣総理大臣，大蔵大臣を歴任）の長男で，相手の黒木愛子は陸軍大将・黒木為楨の娘というカップルであった。記事では，華族会館[12]で行われた結婚披露宴の主要出席者として，井上馨，桂太郎，大山巌，澁澤栄一，尾崎行雄ら明治の政財界要人の名前を挙げている。また，「旧高松藩主松平家が子息の結婚披露で，旧藩士百余人を招待」(1885.4.7)，「前田侯爵家から岡部子爵家へ送った嫁入り道具，多すぎて入らず，広い家へ転居」(1891.9.18) など旧公家・武家などの華族のブライダル報道も読める。他方，芸能人のブライダルに関しては「俳優の紋三郎と女優の梅代が結婚へ」(1910.6.21)，「市川左団次の結婚式」(1911.12.6) などが見られる以外に，表に抜き出してはいないが力士の婚礼も複数回記事とされていた。

念の日」として復活した。ただし，神武天皇の即位を古い民俗的な伝承にすぎないとして，わが国の歴史学者の間では歴史として扱わないことが一般的である。

(11) 明治初期に女性宣教師や日本人キリスト者によって建てられた3つの女学校の1校であるB六番女学校で行われた。同校は，長老教会ニューヨーク婦人伝道局の援助でミス・ヤングマン師が1874（明治6）年に築地居留地6番で設立した女子寄宿学校（The Girls Boarding School，通称・B六番女学校）で，現在の東京女子大学や女子学院中学校・高等学校の源流である。

(12) 1874（明治7）年に発足した華族会館は，イギリス政界の貴族の役割を参考した華族の親睦団体である。現在は一般社団法人霞会館として，現・元皇族，元王公族，元華族が会員となり活動する。

表4　「社会」(24本),「その他」(21本)

発行年月日	明治	見出し	分類
1875.01.26	M8	結婚の風俗は国によって様々　日本では双方の親子が相談しあって決めたい	社会
1875.12.15	M8	婚礼の宴会で大盤振る舞い　仕出し料理代だけで400円／東京	社会
1876.02.23	M9	婚礼2話　仲人と3人の手軽な挙式と，7日続きの超豪華版	社会
1876.03.14	M9	［投書］日が悪いのは十二支みな同じ　婚礼でもめる両家は頭を冷やせ	社会
1876.05.15	M9	派手な結婚式を挙げた社員を三井組が謹慎処分／横浜	その他
1876.12.30	M9	深夜に教会の外で婚礼　牧師が窓から顔を出して式を挙行／米国	社会
1877.03.23	M10	塩釜神社の社殿で結婚式　三々九度の杯を済ませ夫婦の誓約を行う／東京・蔵前	社会
1877.10.12	M10	海軍下士官以下の改名，結婚などは，すみやかに当府へ届け出のこと／東京府	その他
1877.11.17	M10	〔投書〕結婚式は分相応に　見えを張っては出費多く無駄だ	社会
1877.12.27	M10	クリスマスの日に築地の学校で結婚式　他の教会から70人が出席／東京	その他
1884.05.11	M17	政談討論会　論題は「結婚条例を設くるの利害」など／東京・柳橋万八楼	その他
1884.05.15	M17	娼妓薄雪の話　婚礼当日，庄三郎が置き手紙して姿消し破談申し入れ＝続き	社会
1885.04.07	M18	旧高松藩主松平家が子息の結婚披露で，旧藩士百余人を招待／東京・向島	社会
1885.07.05	M18	［投書］写真結婚の害	社会
1885.08.26	M18	トルコ人の婚礼　花嫁側が嫁入り支度から生活費まで持参，活動的な儀式	その他
1885.11.15	M18	海軍武官結婚条例を制定／海軍省	その他
1886.01.09	M19	婚礼費用に困った左官職，衣類を盗み質入れ，逮捕	その他
1887.01.19	M20	外国人との結婚調査（1886年）／東京	その他
1888.01.25	M21	熱海便り　三島神社の稲種交換会　簡素な改良結婚式　など／静岡県	その他
1891.04.02	M24	結婚の栞　結婚媒酌所の利用状況／東京	社会
1891.04.19	M24	婚姻に関する古法風俗　史学会での関根正直の講演要旨＝続く	その他
1891.04.20	M24	婚姻に関する古法風俗　足利将軍の婚礼儀式など／関根正直の講演要旨＝続き	社会
1891.09.18	M24	前田侯爵家から岡部子爵家へ送った嫁入り道具，多すぎて入らず，広い家へ転居	社会
1893.02.03	M26	駕籠で輿入れ　近ごろめずらしい古式の婚礼／東京	社会
1893.08.05	M26	各地の婚礼習慣	社会
1894.07.31	M27	書籍　「風俗画報」出版	その他
1904.09.19	M37	［新細君］婚礼の巻＝1／黒法師（渡辺霞亭）（連載小説）	その他
1904.12.01	M37	婚礼の装束	社会
1905.04.29	M38	葬式婚礼などの馬車借り賃列挙　1頭曳き幌馬車で1日5円	その他
1905.07.15	M38	噂の聞き書き　華族女学校卒業生の結婚　皇族や華族令嬢のご婚約話	その他
1906.01.24	M39	前田侯家の婚儀　分家の前田子爵家次男を養子に迎え長女を娶らす	社会
1906.02.19	M39	川柳　「婚礼」　朴念仁選	その他
1906.08.06	M39	奇聞珍聞　女学校同窓会の結婚相手願望	社会
1907.02.17	M40	出雲大社東京祠と結婚式	その他
1907.08.03	M40	日比谷大神宮で神前結婚　7月に45組	その他
1908.08.23	M41	［応募当選　家庭実益談］＝13　1等　「新案結婚式」楓蔭生	その他
1908.11.03	M41	［社説］婚姻と独身（2）　人生選択の一つ　独身者を指弾しない社会を＝続く	社会
1909.09.30	M42	嫁入り支度品の陳列会／東京	社会
1910.01.05	M43	新婚　日比谷大神宮で戊年最初の婚礼　田代歓六と佐羽千代子	社会
1910.02.12	M43	便利な新婚礼式	社会
1910.03.13	M43	高橋是賢と黒木愛子の結婚披露会／華族会館	社会
1910.06.21	M43	俳優の紋三郎と女優の梅代が結婚へ	その他
1911.12.03	M44	ハガキ集　結婚に見る世の中の矛盾	その他
1911.12.06	M44	市川左団次の結婚式／東京・日比谷大神宮	その他
1912.04.28	M45	結婚に関する風習　吾妻琴と御新造	社会

３．２「海外」,「皇室」に関する報道

分類コード「海外」の記事は349本,「皇室」のそれは375本あり，明治期ブライダル関連報道のそれぞれ1割程度を占め，年平均10~11本取り扱われている。「海外」,「皇室」ともに，日清戦争後に掲載頻度が増えた。「海外」と「皇室」に関するブライダル関連記事を通読し感じたのは，“（世界における）一等国”を目指して倦まず弛まず西洋化に腐心する日本の姿であった。そのまま移入あるいは加工して採用すべき軌範が「海外」に示されており，一方「皇室」は政祭一致による天皇中心の国家建設という明治国家の基本理念を色濃く反映した“権威づけ”が滲んでいた。以下,「海外」,「皇室」記事をまとめた表5の内容を中心に概要を述べよう。

「海外」に分類された記事の多くは，外国の王室（皇族）におけるブライダル報道である。「イタリア皇族」(1883.8.15),「ヨーロッパ王室の結婚話」(1884.6.7),「ポルトガル太子」(1886.5.14),「清国皇帝」(1889.1.26),「ローマ法王がルーマニアのフェルジナンド王とイギリスのマリー姫との結婚を許可」(1892.11.23),「エジプト王がトルコの姫君に結婚申し込む」(1894.8.15),「オランダ女皇陛下とドイツのシュウエリン公殿下」(1901.2.7) など，欧州・アジアを問わず王室（皇室）のブライダル関連記事を掲載する。国民は，諸外国王室（皇室）の有り様を知り，わが国皇室のそれに対する考えを育んだのであろうか。また，日清戦争の講和条約で割譲された地域についても,「台湾現地民の結婚式」(1895.4.27),「澎湖島の結婚式」(1900.2.26),「台北住民の結婚」(1900.3.13) と具体的に紹介している。王制を採らないアメリカ合衆国についても,「米国特別通信　ヤンキー（1）　男女交際の自由，情交，自由結婚」(1889.10.05),「当世アメリカ娘気質　母の勧める結婚を断り好きな男と自由結婚」(1900.1.10),「米国で離婚流行　20年間で50万人」(1904.6.19) など，わが国との違いを際立たせて報道していた。

「皇室」に分類された記事は，皇室および宮号を賜った皇族の一家に関する内容であった。特筆すべきは，1年間に151本もの「皇室」記事が載った1900（明治33）年である。この年に皇太子・嘉仁親王（東宮。後の大正天皇）の結婚があった。元日早々「東宮慶事 4月初旬に結婚の大典を予定」(1900.1.1) の記事が読め，婚礼儀礼を定めた「皇室婚嫁令発表」(1900.4.26) が報道され,「宮城までの行列の予定」・「婚儀での服装」・「皇太子慶事記念切手発行の模様」・「婚儀への献納品　美術品，動植物，飲食品，装飾品」（すべて1900.5.10）などを詳解している。現代のロイヤルウエディングと同様に，相当な熱を帯びて報道されていることが分かる。また，幕末から明治時代には，天皇中心の国家建設の途上，それまで出家していた皇族が還俗して天皇の藩屏としての役割を担うため，宮家が続々と新設された。そうした宮家に関する報道も多く見られる。「伏見宮貞愛親王と有栖川宮利子女王が婚約」(1876.9.22),「山階宮菊麿王の結婚披露」(1902.11.22),「北白川宮貞子女王，有馬伯爵長男頼寧と結婚」(1903.2.7),「竹田宮・常宮両殿下の婚儀の詳報」(1908.5.1) など，その後臣籍降下や皇籍離脱[13]した旧皇族（宮家）の記事がある。

---

(13) 皇族がその身分を離れ，天皇から姓を与えられ臣下（天皇の家来）の籍に降りることが臣籍降下である。このことを賜姓降下と言うこともあり，これらの皇族は俗称として賜姓皇族と呼ばれる。皇籍離脱も同意であるが，これは日本国憲法施行後の語である。1947（昭和22）年に皇籍離脱したのは11宮家51名であった。

表5　「海外」(16本),「皇室」(16本)

発行年月日	明治	見出し	分類
1876.09.22	M9	伏見宮貞愛親王と有栖川宮利子女王が婚約　10月6日に婚礼の儀	皇室
1876.10.04	M9	有栖川宮利子女王の伏見宮家への婚礼馬車行列の次第決まる	皇室
1876.10.10	M9	新婚の伏見宮夫妻がお礼に皇居を訪問	皇室
1883.08.15	M16	イタリア皇族トーマス・セーヌ殿下の結婚が決まる	海外
1884.06.07	M17	ヨーロッパ王室の結婚話	海外
1886.05.14	M19	ポルトガル太子の結婚　リスボンからの通信	海外
1888.04.11	M21	ビスマルクの辞職は脅しの辞意　婚姻を主張する皇帝へのけん制と推測／ドイツ	海外
1889.01.26	M22	清国皇帝の結婚式　皇后の嫁入り道具運搬に1600人が2日がかり	海外
1889.10.05	M22	米国特別通信　ヤンキー（1）　男女交際の自由，情交，自由結婚＝次頁へ続く	海外
1892.11.23	M25	ローマ法王がルーマニアのフェルジナンド王とイギリスのマリー姫との結婚を許可	海外
1894.08.15	M27	エジプト王がトルコの姫君に結婚申し込む	海外
1895.04.27	M28	台湾現地民の結婚式	海外
1899.12.05	M32	皇太子殿下の御慶事で懲戒官吏に特赦令の内儀	皇室
1899.12.18	M32	東宮御慶事について	皇室
1900.01.01	M33	東宮慶事　4月初旬に結婚の大典を予定，終わって伊勢宗廟へ参拝	皇室
1900.01.10	M33	当世アメリカ娘気質　母の勧める結婚を断り好きな男と自由結婚	海外
1900.02.26	M33	澎湖島の結婚式	海外
1900.03.13	M33	台北住民の結婚	海外
1900.04.26	M33	皇室婚嫁令発表／宮内大臣	皇室
1900.05.10	M33	皇太子・同妃両殿下の宮城までの行列の予定	皇室
1900.05.10	M33	皇太子・同妃両殿下の婚儀での服装	皇室
1900.05.10	M33	皇太子慶事記念切手発行の模様	皇室
1900.05.10	M33	婚儀への献納品　美術品，動植物，飲食品，装飾品　ほか	皇室
1900.05.10	M33	欧州諸国の皇室の結婚例　寺院で極めて簡単に	皇室
1901.02.07	M34	オランダ女皇陛下とドイツのシュウエリン公殿下は7日に結婚式	海外
1901.04.06	M34	侯爵山内家婚礼式　お見合いの式は伊勢流にのっとり	皇室
1902.11.22	M35	山階宮菊麿王の結婚披露	皇室
1903.02.07	M36	北白川宮貞子女王，有馬伯爵長男頼寧と結婚　婚儀の模様	皇室
1904.06.19	M37	米国で離婚流行　20年間で50万人／外国電	海外
1907.01.12	M40	韓国皇太子のご結婚式で，これからの儀式	海外
1908.05.01	M41	竹田宮・常宮両殿下の婚儀の詳報　二重橋外の光景　御学問所　供膳式　ほか	皇室
1911.05.05	M44	日本人と朝鮮人の結婚規定／朝鮮電	海外

3．3ブライダル関連「広告」について

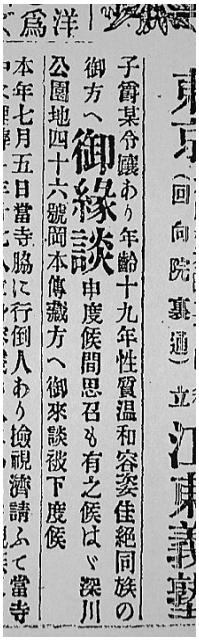
明治期『読売新聞』のブライダル広告の代表例をまとめたのが表6である。広告の初めは，嫁を募集する「23歳から30歳の結婚希望の女性は連絡を」(1880.1.27) であった。連絡先として「下谷通新町14番地　岡本」と記載が読めるが，岡本氏が個人で出稿したのか，氏が結婚紹介業を営んでいたのかは不明である。このように，嫁あるいは婿の募集や，結婚を希望する男女の紹介を仲介する結婚媒酌業の広告が数多く掲載されている。たとえば図1の「子爵令嬢年齢19，御縁談申し度く候／深川公園地　岡本伝蔵」広告は1888年月12日から，14日，15日，16日，17日と13日を除く連続5日間出稿していた。明治時代のブライダル産業の広告は，前出の結婚紹介業のほか，「『世界婚姻奇談』巌々堂」(1882.4.16) を著した出版業，「御婚礼一式　仕出し御料理／芝浦大の家」(1896.9.28) の料理屋（図2），「結婚，商取引等の身元調査／京橋区東港町・中央究明社」(1897.1.09) の身辺調査業，「ご婚礼お化粧

／京橋区竹川町　理容館本部」(1909.5.18) の美容業,「御婚礼式服式具／東京今川橋　松屋呉服店」(1910.12.1) は現在の松屋銀座デパート (東京都中央区銀座3丁目),「盛花　祝辞宴会婚礼用, 室内装飾請負／府下目黒不動前　みやこ園」(1912.1.02) は当時主流であった自宅で行う結婚式をサポートする装花業などが見える。多種多様な広告から, 業態や事業内容こそ現代と異なるが, 業種という面では変わらないブライダル産業が存在したことがうかがえる。また, 現代ではこのような広告はまず存在しないと思われるのが,「旧広島藩諸君に広告　長之君が19日ご結婚／浅野家扶」(1891.12.21),「内藤信任様アイ子様が結婚, 旧村上藩諸君に告ぐ／内藤家扶」(1893.4.3) などの旧藩士向けの結婚報告広告である。ざっと見えるだけでも「真田家-信濃松代藩」(1885.11.15・1895.11.2), 前出「浅野家」(1894.4.3・1900.4.26),「酒井家-小浜藩」(1894.4.5),「蜂須賀家-徳島藩」(1895.12.24),「脇坂家-播磨龍野藩」(1901. 11.22) があり, 明治維新34年を経ても旧藩主君と旧藩士の関係が残っていたことをうかがわせる。

表6　「広告」(19本)

発行年月日	明治	見出し
1880.01.27	M13	23歳から30歳の結婚希望の女性は連絡を／下谷通新町　岡本
1880.09.05	M13	官員の士族と結婚希望の女性はご連絡を／東京小石川竹早町　主人
1881.10.06	M14	社員募集／神田区一ッ橋　結婚共恵社
1882.04.16	M15	「世界婚姻奇談」／東京・神田雉子町　巌々堂
1885.10.21	M18	有名売薬舗の養子求む, 夫婦養子も可／東京日本橋区檜物町・結婚媒妁所
1888.08.12	M21	子爵令嬢年齢19, 御縁談申し度く候／深川公園地　岡本伝蔵
1891.06.01	M24	結婚媒酌＝士族32歳会社員月給50円, 22歳以下初縁娘／結婚媒酌所
1891.12.21	M24	旧広島藩諸君に広告　長之君が19日ご結婚／浅野家扶
1893.04.03	M25	内藤信任様アイ子様が結婚, 旧村上藩諸君に告ぐ／内藤家扶
1896.03.02	M29	結婚紹介所／神田明神宮　高砂屋
1896.09.28	M29	御婚礼一式　仕出し御料理／芝浦大の家
1896.11.29	M29	婚礼道具一式／神田区小川町　加藤良助
1897.01.09	M30	結婚, 商取引等の身元調査／京橋区東港町・中央究明社
1901.10.24	M34	教育保険, 結婚保険, 集成保険／大阪　日本教育生命保険株式会社
1902.05.12	M35	書籍「英文新婚旅行」／東京市京橋区　小川尚栄堂
1909.01.30	M42	書籍　斎藤秀三郎著「日英新婚むつきの巻」／東京日本橋区　興文社
1909.05.18	M42	ご婚礼お化粧／京橋区竹川町　理容館本部
1910.12.01	M43	御婚礼式服式具／東京今川橋　松屋呉服店
1912.01.02	M45	盛花　祝辞宴会婚礼用, 室内装飾請負／府下目黒不動前　みやこ園

図1　子爵令嬢の婿募集


東京（回向院裏通）立
子爵某令嬢あり年齢十九年性質温和容姿佳絶同族の
御方へ御縁談申度候間思召も有之候はゞ深川
公園地四十六號岡本傳藏方へ御來談被下度候
本年七月五日當寺脇に行倒人あり檢視濟請ふて當寺

出所：『読売新聞』1888年8月15日

図2　料理屋「芝浦　大の家」

傷物要心
いろは堂
芝浦
大の家
本月十七日以來

出所：『読売新聞』1896年9月28日。「見晴らし大の家」とコピーが読める。

4．結言

「近代日本のブライダル報道」の渉猟は，ブライダル研究を進めるための基礎的な作業である。したがって，この成果はわが国のブライダル産業あるいはブライダル文化などの研究に資することが期待される。こうした本稿での研究の性格を認識した上で，その価値について結言として述べてみたい。

まず，明治時代の『読売新聞』に掲載されたブライダル関連記事および広告3,375本をすべて通読した意味である。われわれがブライダル研究をスタートさせて痛感したのは，研究方法が確立していないことと，既存の経営学や経済学の手法を用いて研究を進めることの限界であった。その理由はブライダルを構成する要素が多岐で複雑なことに尽きるが，ゆえに研究方法も含めて手探りで研究に向き合っている状態である。むべなるかな，全体像を把握することが困難になっている。こうした状況にあって，明治期という限定的な時期ではあるが，『読売新聞』掲載記事による全体像を明らかにする基礎的な試みであった。

明治時代は，近世に終わりを告げ近代へと激動する45年である。『読売新聞』はそのうちの40年弱発行された。ブライダル関連記事という立場に限定されるが，本稿は近代化・西洋化の体験者としてその新鮮さに昂揚した新聞社と読者の記録でもある。これらは日本の近代史にとっても史料として貢献することがあるのではないだろうか。そのように言っても，明治時代のブライダル関連記事の持つ面白さをどこまで紹介できたか，いささか心もとない。一方で，今回扱わなかった記事にも，ブライダル研究上価値を持つものがあるだ

ろう。いや，たとえ研究価値という面では弱くても，各記事が扱う出来事や人物について貴重な情報を提供してくれている。われわれはそれらが新しい気づきを与える可能性は高いと確信する。本稿は研究ノートとして概観することが中心であったが，この論攷を徒や疎かにせず，いずれ時期を見て分類コードを絞り込んで詳察したいと考えている。

【参考文献】

今井重男（2014）「近代婚礼創作とブライダル・ビジネスの源流」『千葉商大論叢』第52巻・第1号

小野秀雄（1982）『日本新聞発達史』五月書房。

司馬遼太郎（1978a）『坂の上の雲』（二）文春文庫，文芸春秋。

司馬遼太郎（1978b）『坂の上の雲』（八）文春文庫，文芸春秋。

村上重良（1970）『国家神道』岩波新書，岩波書店。

山本武利（1978）『新聞と民衆』紀伊国屋書店。

読売新聞社社史編集室（1987）『読売新聞発展史』読売新聞社。

読売新聞社「ヨミダス歴史館」。

（2017.1.23受稿，2017.2.8受理）

〔抄　録〕

結婚は人類誕生以来，形を変えながら現代まで続くものである。しかも，一人ひとりにとって，その意味が異なる複雑怪奇なものであるにもかかわらず，社会・時代の影響を強く受けるという不思議な儀礼である。このように掴みどころのない結婚を考察対象にする場合，歴史という時間軸を含めながら，社会的要因，文化的要因など，いくつもの条件を考慮しなければならないと認識する。以上のような問題認識に基づき，本研究ではあらゆることが一変した明治時代に，ブライダルについてどのような報道があったのか，同時代感覚でその軌跡を追った。具体的には，『読売新聞』創刊以来の，ブライダルを扱った新聞記事・広告を渉猟するという作業である。新聞記事は当時の記者が毎日書き続けたドキュメントであり，他方，新聞広告は広告主が読者に訴求したいことや受け入れられるであろうと予想した世相を映す鏡である。明治時代の『読売新聞』に掲載されたブライダル関連記事および広告3,375本をすべて通読し，明治期という限定的な時期ではあるが，『読売新聞』記事によるブライダルの全体像を明らかにする基礎研究を試みた。

本稿は近代化・西洋化の体験者としてその新鮮さに昂揚した新聞社と読者の記録でもある。そう言った意味では，これらは日本の近代史にとっても史料として貢献することがあるのではないか。本稿は研究ノートとして概観することが中心であったが，この論攷を徒や疎かにせず，いずれ時期を見て詳察したい。